

氏名	やまもと たいぞう 山本 泰三
学位(専攻分野)	博士(経済学)
学位記番号	経博第294号
学位授与の日付	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	経済学研究科経済システム分析専攻
学位論文題目	実在論から資本主義へ ——現代の経済学方法論と抽象の問題——
論文調査委員	(主査) 教授 八木紀一郎 教授 宇仁宏幸 教授 根井雅弘

論文内容の要旨

本論文は、現代における経済学方法論の動向を、おもに実在論と称される議論を中心に検討し、その成果にもとづいて政治経済学的なアプローチにおける方法論的問題を、抽象という視角から考察したものである。

まず「序論」で方法論的問題を研究することの意義を考察したあと、第1章と第2章で近年の経済学方法論を検討している。第1章「科学論の変遷と問題としての実在論」は、T・ローソン(Tony Lawson)によって経済学方法論の討論に導入された批判的実在論を検討し、それをT・クーン以後の科学論の変遷のなかに位置づけている。本論文は、それを科学論における相対主義的傾向に対する異論とみなし、認識論的次元から存在論的次元に移行しながら素朴実在論を回避しようとする批判的実在論の問題提起を積極的に評価したうえで、社会科学の対象としての「社会的実在」の概念的性質をP・ウインチを参照しつつ論じている。第2章「D・N・マクロスキーのレトリック論」では、逆に科学論においてあらわれた相対主義を極端に推し進めた一つの帰結としてD・N・マクロスキー(D. N. McCloskey)の「レトリック」論を検討している。学位請求者の判断は、マクロスキーは相対主義的な科学論・科学哲学に無批判的に依拠した結果、現実の研究活動に対する理解がかえって素朴なものにとどまっているということである。

第3章「実在論と抽象」では、先行2章の検討を受けて、批判的実在論の核となる社会的実在の構造について探求する。経験的世界を超えた不変の「本質」が現実を規定しているという種類の「本質主義」的誤謬に批判的実在論が陥らないためには、社会科学の対象となる社会的実在とその構造自体が現実の人々の社会的活動によって形成されていることを理解しなければならない。このため、学位請求者は政治経済学の理論をなりたたせる抽象的な価値空間が、人々の現実の交換活動およびその総体としての市場関係によって形成されるというA・ゾーン＝レーテル(A. Sohn-Rethel)の「実在抽象」に手がかりを求めると。

第4章は、「実在抽象」論を介して、方法論的探求から政治経済学の領域に移行したことを受けて、政治経済学における空間の問題を論じる。政治経済学における空間は所与の物理的空間ではなく、資本運動とまたそれに包摂されきれない実体的な異質性の対抗関係のなかで生産されるものである。学位請求者は、H・ルフューブル、D・ハーヴェイ、S・サッセンなどをとりあげるだけでなく、欧州の経済統合とグローバリゼーションのなかでの空間の多元性とコンフリクトをともなう統合過程を考察している。

最後の第5章は、現代における政治経済学の革新の代表的事例であるレギュラシオン理論について、その創生期の著作であるM・アグリエッタ(M. Aglietta)の『資本主義のレギュラシオン理論』(1976)のなかに、「実在的抽象」にあたる過程がどのように組み込まれ、それによってどのような空間形成がおこると考えられているかを考察する。この考察によって、価値的な抽象空間を分割していく制度諸形態の概念が導入され、それに国家的枠組みが与えられることによって国民経済が設定されていることを明らかにする。

結論においては、経済学方法論から政治経済学に至った探求をふりかえりながら、「空間の生産」をめぐる政治経済学の

視点を、世界市場における国家主権の変容とかかわらせて論じている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、現在復活しつつある経済学方法論と関連させて政治経済学の基礎的枠組みについて再解釈をおこなったものである。近年、フランスのレギュラシオン学派や米国の批判的経済地理学などいくつかの政治経済学の革新の動きが見られるが、それらが現代の科学論とどう関連しているか、あるいは過去のマルクス経済学の科学論とどう関連しているかは必ずしも明らかでなかった。政治経済学の革新に対する評価は、主として現実への対応の有効性という観点から行われていた。そのような状況のなかで、本論文のような探求があらわれたことは歓迎すべきことである。

本論文の第一の貢献は、その前半部分において、経済学の現状に対する批評活動のなかで最近目立っている「レトリック論」と「批判的实在論」をとりあげて、それらを社会科学論の視点から検討したことにある。本論文は、「レトリック論」を退け、T・クーン科学革命論以降にあらわれた相対主義的見解への一つの異論である「批判的实在論」の問題提起を高く評価するが、同時にそれが先験的な本質主義におちいる危険を指摘し、それを回避するためには「社会的实在」のあり方を掘り下げて考察することを提唱している。近年復活している経済学方法論をめぐる錯綜した議論の整理の仕方は的確であり、またこうした検討からさらに「政治経済学」の検討に進んだことも評価できる。

第二の貢献は、「批判的实在論」の問題提起を「政治経済学」に活かそうと努力するなかで、A・ゾーン＝レーテルの「实在抽象」の概念を政治経済学の基礎付けのなかに取り入れたことである。「实在抽象」というのは、商品交換の過程によっておこなわれる抽象化が資本運動の前提となる「価値」を生み出すという議論で、日本のマルクス経済学で言えば宇野弘蔵の価値論に近い。商品の生産に投下された労働が「価値」を形成するというだけでは「抽象化」の過程が等閑視される。本論文は、政治経済学の対象となり、資本蓄積がおこなわれる「価値空間」自体がこの「实在抽象」によって成立すると論じ、またそのような論理構成がレギュラシオン理論などのような革新された政治経済学に適合的であることを発見している。

第三の貢献は、現実には遂行される抽象化によって成立する「抽象空間」と実体的な異質性によって多元的な空間が生産されるとして、政治経済学のなかで「空間の生産」を論じたことである。これは空間を領域にわけて支配する国家主権を問題にする政治学、賃労働関係、貨幣・金融制度などの制度諸形態に注目する制度の政治経済学と結びついて、現代経済の政治経済学的分析にとって有力な視点になるものである。本論文は、十分に発展させられたものではないが、欧州経済統合やグローバル化の例をひきつつ、この視点の有効性を示している。

本論文の貢献は上記三点において認められるが、問題点がないわけではない。

第一は、政治経済学の対象の理解において、「实在抽象」を基本的な切り口としたため、論理のはこびが一極的なものになり、残存する異質性の根拠が明確でないことである。それは、抽象化される前の現実（自然環境の多様性、労働者の文化的特質など）による場合もあれば、抽象化された価値空間を前提した資本運動によって生み出された結果（空間的集積、空間的に固定された資本など）である場合もあるだろう。「抽象的空間」に還元されない国家主権や制度諸形態についての議論をいまだ少し明確に整理することも可能であったと思われる。

第二には、後半の政治経済学的探求において、研究者自身の探求の方法論との関係が背景に退いてしまっていることである。「实在抽象」の過程に注目せよということはたしかに有益な示唆であるが、個々の領域にわたった実際的な研究指針にまで具体化されていないといううらみが残る。

第三には、新世代の研究者に望むことではないかもしれないが、過去の日本のマルクス経済学のなかで、イデオロギー論や反映（模写）論をめぐって積み重ねられた論争についての言及がないことが残念である。不生産的な論争が多かったことも事実であるが、本論文がとりあげた問題に関連した部分もあるので、現代の科学論の視点から過去の論争の意義と限界を示してほしかった。

このような問題点が残るが、現代科学論と政治経済学を結びつけた本論文の価値を打ち消すものではない。よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成19年2月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果合格と認めた。